



あおもり創生☆News No.7

◆topics◆

- [三村申吾知事”青森県で一緒に仕事ができたらうれしい”](#)
 - [「学生の想い」にどう応えるか〈大学間の情報交換から〉](#)
 - [自分の直感を信じ、チャンスを掴んで頑張してほしい](#)
 - [速報 青森創生人財育成・定着推進協議会 & 講演](#)
 - [わたしの「食彩」、わたしの「思い出」](#)
-

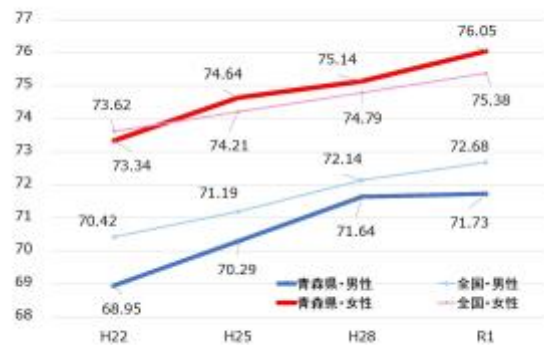
～「弘前大学学生めしレシピコンテスト最優秀賞」受賞者佐藤さん寄稿

◆三村申吾知事”青森県で一緒に仕事ができたらうれしい”◆

この度、「弘前大学医学部保健学科 看護学専攻生と知事との懇談会」が開催されました。



健康寿命



出典：厚生労働科学研究「健康寿命及び地域格差の分析と健康増進対策効果の検証に関する研究」

冒頭、三村知事から、日夜、感染制御を行いつつ、必死に医療や業務に対応していることについての謝辞と、県民の平均寿命(平成27年)は、全国に比べ、男性が2.10歳、女性は1.08歳短いですが、健康寿命が伸び、全国との差は縮小していることに触れ、「弘前大学COIプログラム」の取組が寄与しているとして、感謝が述べられました。

さて、本県の看護職員従事者数(令和2年12月末、人口10万対)は、全国平均を少し上回っている。

看護職員の6割が病院勤務となっているが、在宅医療を充実させるため、病院以外に就業する看護職員の確保も課題。

今や青森にいながらにして世界とつながる時代。最新の研修も受けられる。

通勤時間は、都会と比べ1日約51分、勤続35年で7,300時間のゆとりが生まれる。子育て環境も充実していて、仕事と育児が両立しやすい。

看護師としてどのように生きていくかが大事。最初は県外就職でもいい。

県でもキャリアアップの支援をしているので、いろいろ回って最後は青森県で一緒に仕事がきたらうれしい、と。

本県の看護職員従事者数の状況

1 看護師等の全国比較

【資料】厚生労働省「国勢調査」

【令和2年12月31日現在の従事者数と人口10万対比較】

	保健師	助産師	看護師	准看護師	合計
青森県	718	336	13,211	4,637	18,902
	58.0	27.1	1,067.1	374.6	1,526.8
全国	44.1	30.1	1,015.4	225.6	1,315.2
差	13.9	△3.0	51.7	149	211.6

2 県内における就業場所別看護職員従事者数（実人員）



13

青森県の暮らしやすさ⇒ゆとりある生活時間

通勤時間の短さ（全国6位）

自宅から勤務先までの通勤時間（平日一人あたりの平均通勤時間）

神奈川県 110分 > 青森県 59分

【総務省統計局：「平成28年社会生活基本調査」より】

ストレスに満ちた日常



14

青森県の暮らしやすさ⇒仕事と育児の両立

仕事と育児が両立しやすい

○ 育児をしている女性の有業率

（対象年齢：25歳～44歳）

青森県：77.1%（全国10位） > 全国平均：64.4%

○ 女性の有業率と育児をしている女性の有業率の差

（対象年齢：25歳～44歳）

青森県：▲3.3%（全国1位） < 全国平均：▲11.6%



決め手は、「待機児童ゼロ」をはじめ、子どもを安心して育てられる青森県の子育て環境の良さ！

15

続いて、学生から、男性看護師の育休取得状況についての質問や、県内施設の就職情報を SNS で発信してほしいといった要望も。

「北海道出身だが、知事の話聞いて青森県への就職も考えてみようかと思った」という学生もいました。

三村知事と学生が熱く語り合ったひと時でした。

◆「学生の想い」にどう応えるか〈大学間の情報交換から〉◆

16校が参加する「青森創生人財育成・定着推進協議会」。

本年度も大学間の情報交換は積極的にやっていきたい。と、まずは青森ブロックを訪問。



ご対応くださったのは青森県立保健大学の小山内先生、櫻田さん、高谷さん。



青森中央学院大学は成田先生、寺井次長。

お話の中から共通項を拾い上げてみました。

- 若年層人口は減少の一途！16校は仲間であり、またライバル。
- 共通のベクトルで何をやっていったらよいか？企業と大学、学生との間の情報交換が不足しているのでは。
- 「学生の想い」と「企業が考えていること」にギャップがあるため、いろいろな企業から具体的に役立つ、生の情報を引き出すために、学生との情報共有の場をつくりたい。
- 企業としての姿勢—今やろうとしていること、将来目指していること—が見えるようにしてほしい。
- 学生なりに感じるものがあれば、その企業に興味を持つ。情報誌ではわからない生の声。
- 良いことだけを並べるのではなく、現場のリアルな話を学生に聴かせたい。
- われわれ(協議会)の使命は、「学生をどう採用してもらうか」「学生の考え方・意向を企業に正確に示し、企業が求める人財とのミスマッチを解消すること」。
- 企業の労働力不足は切実で、こうした中、青森を選んだ学生が安心して働くための情報提供が必要。
- 企業・経営者とざっくばらんに話せる機会を大学でつくることができれば。大学の課外活動が解禁になれば企業見学など再開したい。

など、目から鱗のお話でした。

◆自分の直感を信じ、チャンスを掴んで頑張してほしい◆

弘前市の「地元企業魅力発信事業」に弘前大学の学生が参加。

今回の訪問先は有限会社「くまばん」さん。開業70年の自動車整備会社。迎えてくれたのは、3代目の熊谷さくらさんと、事務所入口に置かれたかわいらしい看板。



インタビュアーは人文社会科学部4年のAさん。

県内企業を取材しウェブ上で紹介する活動をしている、学生サークル「CANVAS」

(<https://musibiz.wixsite.com/aomoricanvas>) に所属。

これまでに様々な企業を取材し、「青森愛」にあふれた多くの方に感銘を受け、自分も青森を盛り上げたいと県内就職を希望。

今回の取材でも、地域への貢献を大切にしながら仕事をする熊谷さんの姿勢に刺激を受けたAさん。

「町をきれいに」という行動指針を立て、実際に町のゴミ拾いを行っていることや、パイプ椅子の修理など本業以外の注文にも応えていることが特に印象的でした。

今後の自分の就活の中では、仕事のやりがいや、女性ならではの大変なこと、入社前後のギャップについても訊いてみたい、と言います。



かたや、普段は学生とあまり交流がないので、貴重な機会だったと語る熊谷さん。

就活に取り組む学生たちへ・・・

「時流を読むのは難しいけれども、自分の直感を信じ、チャンスを掴んで頑張ってください。
必ず就きたい仕事に就き、なりたい自分になれます！ ご活躍を祈ります」と。

今後も学生が様々な企業を訪問し、その魅力発信に“一役買う”予定です。

◆速報 青森創生人財育成・定着推進協議会 & 講演◆

7月7日、青森市のアラスカ会館において、令和4年度「青森創生人財育成・定着推進協議会」が開催され、引き続き、学生の就活・起業支援のための取組を進めていくことを確認。



青森ブロックでは、業界団体等との連携による企業就職セミナーの開催、弘前ブロックでは、学生と企業との協働による「One Day 業界研究」の実施、八戸ブロックでは、学生の起業支援のための「イノベーション・ベンチャーアイデアコンテスト」の実施、むつブロックでは、むつ市助成による短期型インターンシップの実施、などが計画されています。

令和3年度の学生の県内就職率は、多くの大学等において前年度より高くなっている。

要因としては、コロナ禍の影響により県内志向が高まったことのほか、県内企業の求人が少し早まったこともあるのでは。

こうした動きを浸透させていくため、本協議会としても経済団体に求人の前倒しを要望することを確認。

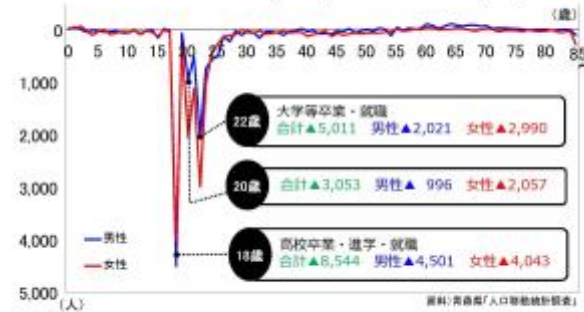
続いて、青森県企画政策部 美濃谷邦康次長により「**あおり若者定着奨学金返還支援制度を始めとした若者定着・還流の取組について**」の講演がありました。



- 本県では、県外への進学・就職等に伴い、18歳、20歳、22歳で大幅な転出超過。また、多くの産業分野で人財不足が顕著になっている。
- 一方、地方創生の取組の進展やコロナ感染症の影響により、U I ターンへの関心が高まっていて、ニーズの高い「仕事」「住まい」「暮らし」に関する情報を中心に、相談者にしっかり伝えることが重要である。
- 県では、産業人財の確保と若者の定着・還流をねらいとして、本年度に「あおり若者定着奨学金返還支援制度」を開始。若者(35歳未満)が、青森県内に住み、登録企業で6年間働き続けたとき、県と企業とで奨学金返還を支援する。若者から、学ぶ場所・働く場所・生きる場所として「選ばれる青森」にしたい。

■若者の県外流出

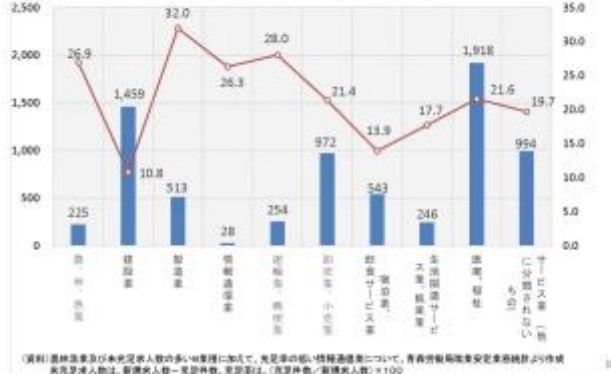
■年齢別社会増減数（2015(H27)年10月～2020(R2)年9月）



⇒ 県外への進学・就職等に伴い、
18歳、20歳、22歳で大幅な転出超過

■産業人材の不足

産業別未充足求人数の状況（令和4年4月）



■移住相談者のニーズ



若者の奨学金返還を支援します（'23-'24年度採用募集中）

若者（35歳未満）が、青森県内に住み、登録企業で6年間働き続けたとき、県と企業とで奨学金返還を支援する制度。利用にあたっては**事前登録**する必要があります。

【対象となる方】

- ・日本学生支援機構又は青森県育英会の奨学金利用者
- ・大学・短大等を卒業した35歳未満の者
- ・現在青森県内で正所雇用されていない者

【支援額】 企業・県が1/2ずつ負担

学校区分	支援額（企業が指定）
大学等	150万円、100万円、60万円 のいずれか
短大等	75万円、50万円、30万円 のいずれか

※支援額は、償還期間（借入）の2分の1が上限。

まず専用HPで登録してください。就職活動を経て、サポート企業に内定・就職した後、県からの支援対象者として決定を受け取ります。

支援制度利用時の奨学金返還の流れ

（利用しない場合）

※講演会資料より抜粋

質疑応答では、大学側から企業の職種は幅広いほうがよいとの要望があり、県からは、数だけでなく、エリアが偏らないように、また様々な職種に登録をお願いするため県内を回っているなど、活発なやり取りが行われました。

◆わたしの「食彩」、わたしの「思い出」◆

～「弘前大学学生めしレシピコンテスト最優秀賞」受賞者 佐藤さん寄稿

学生の皆さんに、材料費をなるべく抑え、手軽に作れる美味しいご飯をお腹いっぱい食べてほしい！と、青森の郷土料理「貝焼き味噌」をアレンジして作ったレシピですが、身に余る賞を頂戴することになり、本当にありがとうございました。

私には息子と娘がおり、2人とも家を離れ、仙台に住んでおりましたので、帰省する度に「あれ食べたい」「これ作って」とせがまれたものです。

息子は寮生活で、栄養バランスのとれた食事が提供されてはいたものの、食べ盛りの若者にとっては物足りなかったようです。

「貝焼き味噌」はもちろん、ふるさとの味をおかずに夢中でご飯を食べてくれる姿が嬉しくて、息子が帰省する日は沢山ご飯を炊いて、張り切って料理したものです。

同じく津軽の味「きのこの塩辛」。娘のリクエストは決まってこれでした。

娘は自炊でしたが、これに使う「納豆昆布」や「さもだし」が当時仙台では手に入らないから作れない、と。

同じ東北と言っても、食文化の違いを感じたものです。

普段はあまり米を食べない娘でしたが、この時とばかり、何杯もおかわりしてくれたことを思い出します。

「貝焼き味噌」にしても「きのこの塩辛」にしても、ふるさとの味・おふくろの味だと思います。

親元を離れている学生さん、あるいは実家から通う学生さんも、学生生活の思い出に是非、この「貝焼き味噌風玉子丼」を作り、食べてみていただきたいです。

その味を通して「青森」を想ってもらえたら大変嬉しく思います。





◆編集後記◆

6月16日に行われた三村知事の講演は、私、須田も拝聴しました。会場は熱気があふれんばかり。知事はテレビで拝見しているご様子そのまま、講演は楽しく、あっという間の1時間でした。

また、県企画政策部の美濃谷次長から奨学金返還支援制度についてのご講演をいただきましたが、各校の間に関心が高く、タイムリーな企画だったと思っています。

さらにうれしいことに、「弘前大学学生めしレシピコンテスト」で最優秀賞を受賞された佐藤さんから、「わたしの「食彩」、わたしの「思い出」と題するご寄稿があり、まさに本誌？に「彩・いろどり」を添えてくださいました。

実家を離れて暮らすお子さんの帰省を待ち望み、「大好きなものでお腹を満たしてあげたい」、そんな想いで作ったレシピで応募してくださっていたのですね。学生だけでなく、「今

日のおかず、何にしようかな？」と頭を悩めている皆さん(私も・・・かも)、佐藤さんのレシピを参考に「自分の一品」を作ってみるのもよいかもしれません。

【編集責任者 弘前大学社会連携課 須田 誠一】

[バックナンバーはこちらから・・・](#)